

この年をして何故天山北路なのか、
という、たしか私が中学四年生、六
十年ばかりまえ、東洋史の授業で天山
北路とか天山南路を聞いたことに始ま
ります。その語感というか、シルク
ロードなどというよりはるかにそのあ
たりの世界を言い表しているような魅
力的な地名が、のちのちまで頭の中
に残りました。

その次に、やや具体的にこのあたり
を知識として吸収したのが、明治四十
二年に博文館から出た日野強の『伊犁
紀行』という本と、F・E・ヤングハ
ズバンドの、天山南路からヤルカンド
を経てK2の北側のムスターグ峠を越

えてバルトロへと出る旅行記、この二
冊を前後して買って読んだことにあり
ます。たしか昭和十五年ごろのこと
です。

この二つの大旅行は、大筋としては
ほぼ同じ行程を辿っているが、日野強
は天山北路へ入り、伊犁から天山山脈
の三〇〇〇メートルの峰の峠を越え、
通って天山南路のカラサルへ出てい
る。また、ヤルカンドからはカラコル
ム峠を越えてラダックのレーへ出てい
るのが、ヤングハズバンドのみちと違
うところです。しかし年代的に言う
とヤングハズバンドは日野よりも二十
年前(明治二十年)にこの探検旅行を

やっていますから、日野は先輩英国人
の業績に大いに触発されるところが
あったのではないかと。彼は旅行の最終
地点のスリナガルへ着くや、既に大
佐に昇進していたヤングハズバンドを
表敬訪問し、旅行中伴った伊犁産の愛
馬を献呈していることなんか、なか
か興味深いものがあります。

早い話が、私はこの二人の先人の旅
行に憧憬のようなものをもって、
というところが本音でありましょう。
四年前にタクラマカン砂漠の周辺(天
山南路)をぐるっと廻りましたが、北
路へは行けなかったもので、今年(平成
二年)の六月から七月にかけて出かけ
てきました。八十歳を目前にして、少
年時代の夢を果たす喜びを味わえる
かも知れない。特徴と言えば言えるの
は、旅行社や団体ツアーに入らない
で、単身出かけたということです。日

織内信彦

天山北路の話



1991 年 (平成 三年)
3 月号 (No. 549)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- 天山北路の話……………織内信彦……………(1)
- 海外の山……………(2)
- 「屈曲部」
- 計報 初見一雄氏、沼倉寛二郎氏、
相沢裕文氏……………(3)
- 「ナムチャバルワ」に統一(3)
- 上高地山岳研究所改築案について……………(4)
- 1989 年度資料受入報告(3)……………(6)
- 東西南北……………(6)
- 「山陰の百山が鳥取県出版文化賞
に輝く」「石間さん 1500 峰達成」
「知床岳登山記(1)」「1991 年早春
雑詠」……………(7)
- 図書紹介……………(7)
- 「山岳年鑑'90」「女性のための
百名山」「山想 8 号」……………(9)
- 報告
- 「現地小集会 生藤山」「磐司岩
探索山行(2)」「越後支部年次
晚餐会」「三水会現地集会」……………(10)
- 自然保護随想……………(12)
- 遭難事故に対する警告……………(12)
- 会務報告……………(13)
- 海外登山基金委員会、1 月理事会、
ルーム日誌、会員異動、タンボチェ
僧院再建協力募金者ご芳名、新入
会員(復活)、住所変更
お知らせ……………(14)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10 時～20 時
水、金曜 13 時～20 時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13 時～20 時

お知らせ
電話

3234
六六五九

私が行った時期は、ちょうど新疆ウ
イグル地域で反政府運動が起こり、例
によって人民解放軍と対決している
きであった関係からか、天山北路を
通って伊犁へ入ることが予想外に面倒
だった。そのため北京やウルムチで
それぞれ四、五日の時間の空費を余儀
なくされました。

ウルムチで大変嬉しいことがあり
ました。四年前に天山南路を日本から持
ちこんだ車で走ったのですが、そのと
きのリエゾン・オフィサーだった新疆
登山協会の雷さんと再会し、私の専属
運転手の張君を呼んで短時間ですがそ
の車に乗ったことです。

ウルムチから終着地伊犁まで約七〇
〇キロあります。その間ずうっと左手に
天山山脈の白い連嶺を、右手には無限

に広がる大草原、ジュンガル盆地とを眺めながら、東京―広島くらいの距離がありまじょうか、しかし途中で精河というオアシス集落で名もない宿屋へ泊まりました。

日野強はこのあたりを描写して「腥気凛然人を襲うものあり、猛獣の巢窟、時に一陣の陰風地を巻き、猛虎嘯き、飢えたる狼吼るが如く……」と伊犁紀行に述べています。

羊乳とナンだけの朝食を五台という集落でとっていると、旅芸人の一行がどやどやとやってきました。名を聞くとビリバとタヂクチ、ウイグルの女たちです。そして伊犁へ行くなら自分たちのトラックへ乗らないかと誘ってくれました。「伊豆の踊り子」を思い出してふらふらとその気になりかけましたが、私もウルクチから小さな車を一台チャーターしているので遠慮しました。もしも連中のトラックへ同乗していれば、外国人の禁止地域へも案内案に行けたのではないかと思うと惜しいことをしたと思います。

伊犁の中心地を現在は伊寧と言う。日野強が行ったころの伊犁の恵遠城、この辺に昔の伊犁將軍府があったのですが、たしか現在の街から四〇キロくらい離れていますが、かすかに残っている城壁や鼓樓に私は往昔を偲んできました。清国の時代にロシアと国境紛争

海外の山

屈曲部

ヤルツァンポーの流れは、緑色である。チベット人たちは、この川の畔に独特の文化を築き上げてきた。

ナムチャバルワは、そのツァンポー川が東から西へ大きく屈曲する部分の右岸にそびえる峻峰である。七七八二メートル。いま世界で最も高い未踏峰だ。

この山の魅力は、何といっても探検的要素にあふれていることである。

チベットのツァンポー川が、アッサムを流れる大河、ブラマプトラ川と同じであることがわかったのは、一世紀ほど前である。バンデイト、と呼ばれるインドの測量探検家たちが、活躍した。

キントゥプ、という男がとりわけ重要であった。インド測量局の命で中国人ラマ僧と二人、ツァンポーに沿って下り、ツァンポーの屈曲部を探る使命を帯びていた。一八八〇年のことだ。

が、ラマ僧の裏切りで、キントゥプは、奴隷の身となってしまう。脱出後、さらに一人で川沿いに下り、とある僧院で働きながら、秘密の調査を続けた。

色を塗った丸太をツァンポーの流れに投げ、ベンガル湾に流れ出るかどうかチェックする―それこそが、キントゥプに課せられた密命であった。探検の開始から四年もたつて、彼はインド測量局に連絡した上、密かに五十本の丸太を流した。

悲運は、その連絡を受けた別のバンデイトが、死んでしまっていたことである。丸太は、見守る者もなく、虚しくベンガル湾の海に漂い出たのであった。

一九一三年、同じ測量局のイギリス人、モーズヘッドと植物学者のベイリーがこの川を下り、三十年前のキントゥプの詳細な口述報告が、きわめて正確であることを確認した。深い峡谷をはさんでナムチャバルワのすぐ横にギアラペリという山があることをベイリーたちは発見し、ナムチャバルワの登攀の可能性を探った。

一九九〇年十一月、十二月、重広恒夫(四三)を日本側リーダーとする日中合同偵察隊が、この山を訪れた時、隊員たちは三五二〇メートルのベースキャンプからわずか八日で、ナムチャバルワのてっぺんにつながるナイプン峰直下六九〇〇メートル地点に達した。頂上へは、ここから北に切れ落ちる壁を下り、再び登りかえさねばならない。

「二気に下り、一気に登る。小銃精鋭のアルパイン・スタイルが合う山」と、重広は言う。今秋の本隊では、隊長を除く登攀メンバーは日中各五人に絞る予定だ。ところで、世界の登山家が希望していたナムチャバルワの登山については、一九八六年日本ヒマラヤ協会が西藏登山協会と議定書を締結した経緯がある。その後、曲折があり、無論資金問題もからんで中国登山協会と日本山岳会の合同隊が挑戦することになった。中国としては一九八四年以来の再挑戦となる。

ヒマラヤ協会としては「独自のナムチャバルワ」を今後も追っていく、という。その一つとして、インド登山財団と合同で「ブラマプトラ川航下」を試み、この三月初めまでに無事成功した、と伝えられる。中国国境からバングラデシュ国境まで千二百キロの航下だった。

探検史に話題の多い山だけに今後も、この山の「行方」を見守りたい。

(江本嘉伸)



故 初見一雄氏

を起し、伊犁条約を締結した故地です。二回ばかり武装兵士の検問を受け、いやな思いをしましたけれども、しかしはるかなる地域へ来たものかなとの溢れる実感に私の気持ちは満たされていました。

トルファン、ハミ、敦煌へと車や列車を乗りつぎ、蛇々と旅を続け北京へ

計 報

初見一雄氏

(本会名誉会員。会員番号一三九六番)

氏は昨年三月二十五日夜、自宅全焼という不慮の災難に遭われ、重体のまま救出され、東京女子医大病院熱傷救急センターに収容されました。その後医師団の懸命の努力によって火傷の方は回復したものの、意識が回復せぬまま板橋の木村病院に転院。そこで十ヶ月の長期に亘る闘病生活をつづけておられましたが、その努力も空しく、意

戻りました。機会に恵まれたら、伊犁からカラサルへ天山山脈の小さな峠を縫って行く旅をしたいものだと考えています。

(この原稿は昨年九月十九日、三水会での一時間余の談話を、編集部で要約したものです。)

識をとり戻すことなく、本年二月六日午前四時三十分永眠されました。享年八十二歳。ここに慎んで哀悼の意を表します。

氏は昭和の初期、積雪期の穂高で活躍され、上高地の主としても知られ、日大卒業後は北大山岳部にも籍をおかれ、北千島、樺太の山でも活躍されました。戦後は横、三田、早川氏らの(株)紀屋の経営を引きつがれ、紀屋のノレンを守り続けてこられました。

本会にあつては、戦後お茶の水時代に、理事として図書室の管理を担当され、図書基金の創設や書庫の建設にも尽力されました。一方ヒマラヤ登山隊や、南極観測隊の装備や食糧の面でも種々と後進の面倒を見られ、下落合のお宅は、さながら梁山泊の感を呈しておりました。

著書に『すこし昔の話』(昭和四十四年、茗溪堂刊)等があります。

葬儀・告別式は、日大、北大、松高

わらじ会の関係者が世話役となつて、二月七日午後一時より、実姉、初見マリ子さんが、シスターをされている広尾の東京聖心会渋谷修道院の聖堂で行われました。

本会では、生花を供え、田口、織内、望月名誉会員をはじめ、初見さんと旧知の会員多数が参列して弔意を表しました。

(喪主は初見マリ子さん。渋谷区広尾四一三一聖心会渋谷第一修道院)

△ △ △

沼倉寛二郎氏 (本会元役員。会員番号二二八五番)

三水会設立発起人の一人で、長らく三水会の代表をつとめられた沼倉氏は、かねてより病氣療養中のところ、一月十五日午後十時三十八分、老衰のため、永眠されました。享年八十二歳。

氏はお茶の水時代、東京支部の委員長として活躍され、またマナスル登山に際しては、本会の財務担当の常務理事として、募金活動等の面で多大の貢献をされました。

葬儀・告別式は一月十七日午後一時より、新宿区横寺町の長源寺でとり行われましたが、本会からは三水会のメンバー、稲門山岳会員など、多数参列して弔意を表しました。

相沢裕文氏

(本会元会員。会員番号四三七三番)

立教大山岳部OBで元毎日新聞運動部、編集委員。二月一日午後一時、心筋こうそくのため死去。五十八歳。

氏は生前、本会技術指導委員会のメンバーとして西穂高の積雪期登山リーダー技術研修会等で活躍された他、昭和四十五年には本会のエベレスト登山隊に、毎日新聞社の報道担当としても参加されました。葬儀・告別式は、二月四日午後一時より鎌倉市の延命寺で行われたが、本会からは村木副会長はじめ立大山岳部関係者多数が参列して弔意を表しました。

(喪主は妻弘子さん。鎌倉市浄明寺二一〇二二〇) (Y・M)

「ナムチャバルワ」に統一

南迦巴瓦峰のカナ書きは、ナムチャバルワ、ナムチェバルワの両方が使用されておりましたが、新聞報道がナムチャバルワで行われていることもあり、今後はナムチャバルワに統一することに致します。

(ナムチャバルワ峰

登山実行委員会)

上高地山岳研究所 改築案について

山研改築特別委員会

委員会発足以来、改築の実現に向けて具体的な準備を進めてきましたが、ここで設計の概要ができましたので、ご覧頂きたいと存じます。

上高地は国立公園特別保護地区として、施設の建設については非常に厳しい制約があります。その制約の中で過去二年間、主として環境庁の担当管理官と相談を重ねた結果、ほぼ会が意図する規模・内容のものが認められる可能性が見えてきました。

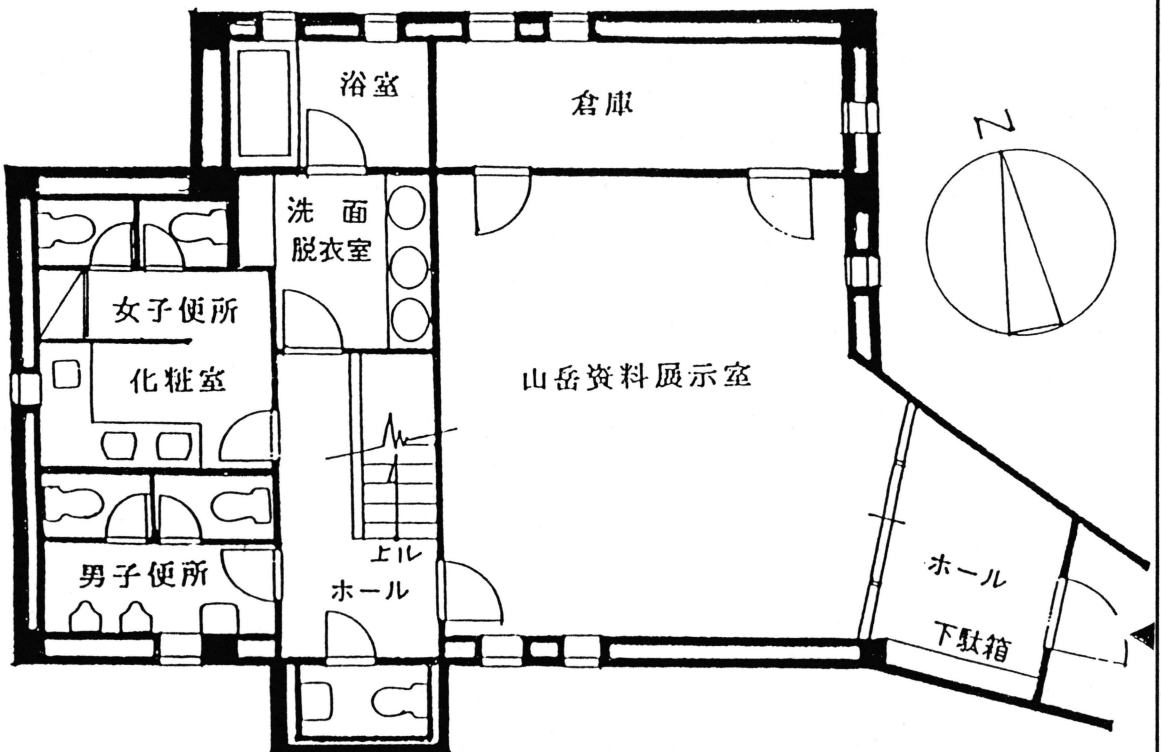
建物の規模ですが、昭和四十七年に今の山研を建てたとき、四十六・一七坪の建築許可をとっていたのが、種々の理由から三十五坪まで面積を縮小して建てた経緯があって、今回も前回の面積までは許可出来るという内諾を得ました。しかも地下室はこの面積に含めないということでしたので、一、二階を四十六坪とし、地下を半地下式として、合計七十三・六坪の規模で設計したのが次に掲げる平面図です。

地下は主として山岳資料室に当てます。会が所有する数々の貴重な資料を展示して一般にも公開し、まさに本会

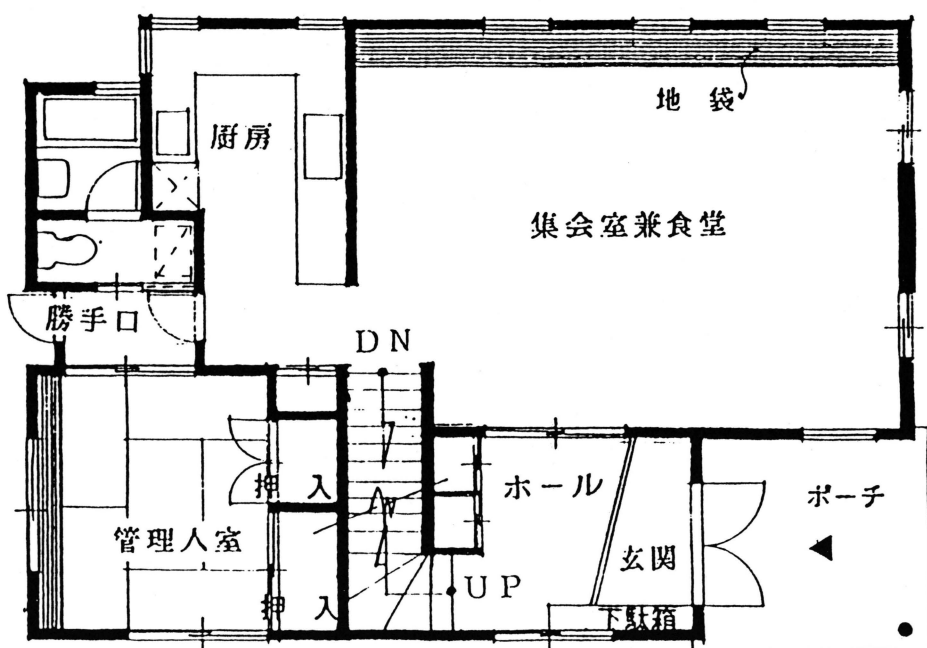
が目的とする山岳に関する知識の普及、健全な登山の指導に資したいと考えます。一階(二十五・八一坪)は食堂を兼ねた集会室が中心となります。厨房は複数のグループが同時に利用できるような構造にします。管理人専用のバス・トイレを設ける等管理人室の住環境は格段に向上する筈です。二階(二〇・二三坪)には二つの研究室とゲストルームを設けます。研究室は八畳と十二畳の大きさを宿泊部屋ともなります。ゲストルームがあれば、外国からのお客も胸を張って案内できます。

トイレのひとつを汲み取り式として将来の冬期使用に備えることにいたします。なお地下は鉄筋コンクリート造、地上は木造で外壁は板貼りとし、屋根は茶褐色の金属板を葺きます。さらに省エネ対策として、ソーラーシステムを熱源とすることなども研究してみたいと考えております。

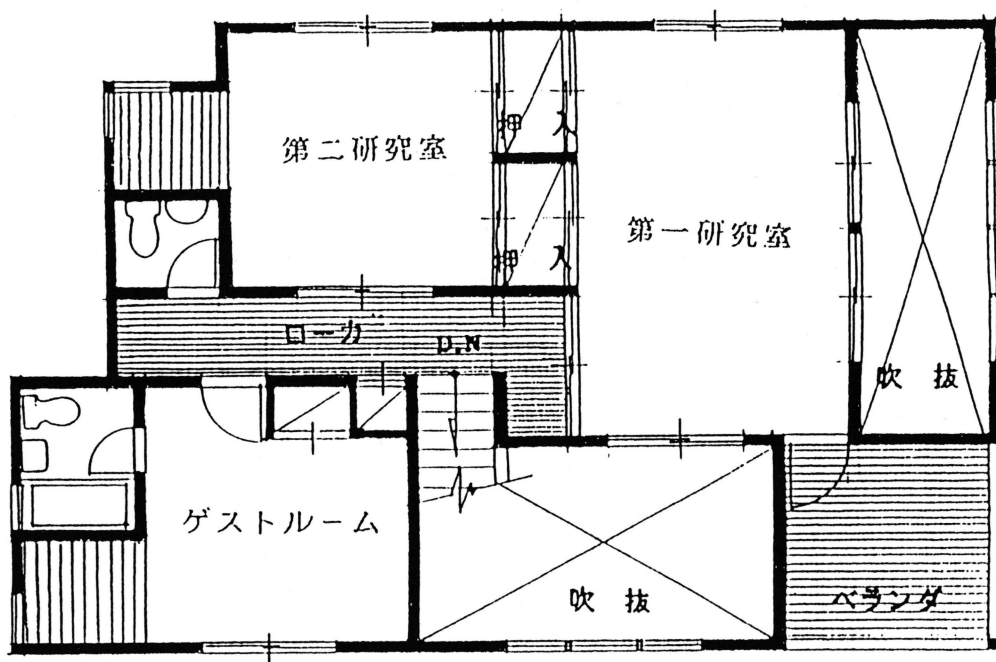
以上が改築委員会で煮詰めた原案です。もとよりこれで決定ということではなく環境庁の意向も同わなければならず、何よりも会員の皆さんのご意見を十分に聞く必要があると思っております。予定通り事が進めば、今年の秋には今の山研の解体に着手することになります。従って設計に合わせるために、ご意見は四月末までにお寄せ下さるようお願いする次第です。



地下1階 平面図



1 階 平面図



2 階 平面図

1989 年度資料受入報告 (3)

資料委員会

番号	品 名 種 類	数 量	受入月日	寄 贈 者	保管場所
505	雨具ヤッケ ナイロン上下 緑 モンベル製 S. 40	1 着	'89.11.27	エーデル 坂倉登喜子	M
506	登山靴 ビブラム底紐付 タカハシ製 S 30~	1 足	"	"	M
507	" 鋏打ち底 双葉製 S 31~	1 "	"	松田柳子	O
508	" スキー兼用 ビレリー・アルピナ底 タカハシ製	1 "	"	今井喜美子	O
509	軽登山靴 ビブラム底 イタリア製 1966 使用	1 "	"	坂倉登喜子	M
510	テントシューズ 1966 使用	1 "	"	"	M
576	オーバーシューズ S 30~使用	1 "	"	"	M
577	ロングスパッツ 手造り紺色ケース入り	1 "	"	"	M
578	" ウス緑 S 40~使用	1 "	"	"	M
579	スパッツ S 初期 ハヶ岳 谷川岳使用	1 "	"	"	M
580	地下足袋 S 40~黒部源流使用	1 "	"	"	M
581	脚絆 手造 紺色 S 40~ "	1 双	"	"	M
582	わらじ " "	1 足	"	"	M
583	ぞうり " "	1 "	"	"	M
584	ゲートル 綿 昭和初期 富士登山に使用	1 双	"	"	M
585	アイゼン 紐付 門田製 10 本爪 ケース入 S 2 年	1 足	"	"	M
586	輪かん 東北地方製 昭和 30 年代	1 "	"	"	M
587	飯盒 昭和初期	1 個	"	"	M
588	スベアストーブ 106 スエーデン製	1 台	"	"	M
589	" "	1 "	"	"	O
590	キャンピング ガスコンロ フランス製	1 "	"	"	M
591	布バケツ 空色 キャンパス製	1 ケ	"	"	M

『山陰の百山』が
鳥取県出版文化賞に輝く

このほど当会山陰支部出版の『山陰の百山』が第十四回(平成元年度)鳥取県出版文化賞の栄誉に輝いた。

この出版文化賞は地方文化の向上を願い、さらに底辺の拡大をはかることを目的として、新日本海新聞社が創設したものである。今回は六十二点対象とされ、そのうち三点(内一点は影井賞)が選ばれた。

なお、『山陰の百山』は支部創立四十周年記念号として出刊されたもので、山陰両県には六百以上の山があるがそのうちから百の「登山の対象となる山」を選び出して紹介したもの(詳細は本紙五四〇号図書紹介を参照されたい)。本書の執筆に当っては山陰支部二十八名が一年余をかけ総力をあげて取り組んだもので、今回の受賞はその汗の結晶が報われたものといえよう。

(編集部)

石間さん
一五〇〇峰達成!

おなじみ石間流登山で知られる静岡支部の石間信夫氏が、このたび一五〇〇峰の登頂を達成した。その登山記録は大学ノートで積み上げて背丈を越える。

石間さん今年七十六歳。第一回目の登山は大正十四年の富士山。爾来六十有余年山に登り続け、その間の山行数は実に約二四七〇回。かくしてこのたびの超人的な偉業となった。

現在の日本記録はこれも本会の元会長今西錦司氏のもつ一五五二峰だが、石間さんは今でも週一回のペースで山行を続けているので、この記録を破るのははや時間の問題だ。ちなみに平成三年の初山行は単独、一月五日、伊豆韮山近くの太平山(二万五千)。

しかし、石間さんの現在の心境は道元禅師の「只管打座、眼横鼻直」であり、ひたすら登り、眼は横に鼻は縦にしていることを知った程度の山行です、といささか謙虚だ。(小倉厚)

知床岳登山記(1)

田中 三郎

知床旅情で知られる「知床」シレット

クとは、アイヌ語で地の果を意味する。そこは哀愁に満ちロマン漂う。海辺はハマナスの花が咲き、海にトドやアザラシが泳ぎ、空に大鷲がはばたき、山にはヒグマが数多く棲息するという。

この知床で、一般に登られる山は羅臼岳と硫黄山で、さらに数十ヶ山稜が延びる知床岬の中間にある知床岳(一二五四坪)に登る人は極めて稀である。私達は昨夏、岳友とともに、ほとんど人の入らない原始境のハイマツ帯の藪漕ぎを続け、雨のなか三泊の幕営をして、ついに登頂に成功した。同行者は昨春ヒマラヤのミニヤゴンカに二度目の挑戦をした川越皓充親子を含む七名であった。

第一日、知床では、まず地元羅臼町警察でヒグマ情報と登山道について尋ねた。警察のヒグマ情報によれば、ヒグマはウナキベツ河口に出没するとのことで、海辺に打ち上げられたトドの肉を食べにくるのだという。また、登山道については確たるルートは判明しなかった。

警察に寄ったあと、私たちは日本でただ一軒トドの肉を食べさせてくれる食堂で昼食をとり、車で相泊まで行く。小雨が降り始めた。漁期で忙しく働く人々の住む番屋前を通り、浜沿いの大玉石を並べたような歩きにくい道をたどって、ウナキベツ川付近に幕営した。

夜中、キタキツネが残飯をあさりに現われる。心配したヒグマでないのではとすると。

第二日、早朝五時十五分、確たる登山情報もないまま、北海道新聞社発行の『山と谷』の記録を唯一の頼りに、ウナキベツ川遡行を開始する。ゴルジュを抜け森林帯となる。ルートをみつけるのは誠に難しい。人の入った痕跡もなく、僅かに獣道のような道が続いている。しかしあちこちの樹の枝に、赤いビニールテープが下がっているのが目安にはなる。

獣道に出るたびに、呼笛を吹き鳴らす。高度計で二五〇坪ぐらいの地点で岩場に出る。さらに二時間ぐらいで広いガレ場に出る。

出発して約五時間後、樹林帯の登りとなり、積層片岩のちよっとした広場で昼食とする。十一時三十分、高度計で五五〇坪地点を通過し、さらに草原に出るが、ここを過ぎると印もなくなり、竹藪の中を強引に藪漕ぎをし、大きなガレ場に出た。矮小なハンの樹のおい茂るなか、すさまじい藪漕ぎの急登だった。腕力に頼り、体重で勢をつけ、藪をかきわけながら登る一級の藪のコースであった。

高度計が八〇〇坪地点まで行くと踏み跡があり、ガレ場に出た。ポロモイ台地と呼ぶ場所である。時刻は十三時

十五分だった。短時間であったが、晴間が覗いて展望が開け、足もとには高山植物の花がとてもきれいに咲いていた。しばらく時の移るのも忘れて見とれていた。

再びすさまじいハイマツの藪漕ぎを始めねばならなかった。昭和三十八年に早稲田の学生が青春の情熱をぶつけて羅臼岳から知床岬の突端まで道を切り開いたというが、その後歩く人が少なかったためだろう。藪が一面をおおいつくしている。わずかな踏跡と、道標らしきものを頼りに進むが、何度も探さねばならない。足が地につかない所が数えきれないほど藪が濃い。一時間ほどして、ようやく池塘がある所に出て休憩。周辺はハイマツがひどく密生している。炊事担当が隊から遅れてわずかにコースからはずれたとき、元のコースに戻るのに四十分もかかったほどである。

― 続く ―

一九九一年早春雑詠

小田 正夫

さむ空にわが家をあとにとほとほと演歌さきつつひとり行くなり

つぎつぎと友らのおかた世を去りてわれは寂しく空を見つめる

朝まだきわが家をあとにことごとと陽光の出もとめて故里の途ゆく

わが米寿近きを聞きて教え子の御志ざさしに頭あがらず

みえぬ眼をいたはりつつもはげまして薬いれる愛しき憶ひ

涙あり残せし妻の哀しさに病みて出でゆく老いにし吾は

雨の音ききつつねむる出湯の宿静かにひとりもの憶ひけり

ハーモニカ吹けども苦しさ嘆かるる床につけどもねつけれぬ夜

山あひの出湯にひたり友どちと憩ふひととき心やすらふ

書を読みて山を愛せし吾なれば苦楽と共に雄々しく生きむ

図書

紹介



山岳年鑑'90

山と溪谷社編

本年鑑は一九八九年初春から一九九

○年初春にかけての、過去一年間に亘る世界の山々を舞台に行われた登山活動、集大成したものである。

雑誌「岩と雪」では、毎号日本および海外の山々での登山活動を随時紹介し、掲載しているが、改めてこれら過去一年間の動向をまとめ、個々の登山記録や出来事の客観的位置づけを明確にしたものである。また、同時に雑誌掲載時には判明していなかった新たな情報を、追補することによって一層正確な事実と情報を把握することが可能となっている。

主な内容としては、世界の登山活動を地域別に網羅した「登山の記録」を中心として、前半部には「動向と展望」「トピックス／ピープル」「物故者追悼」「遭難」等について記述されている。とくに「動向と展望」では本年版が90版として丁度十年の区切りに当たることから、過去十年間の活動をふり返ると共に九〇年代の展望を記述している。後半部の「世界の山々へのパスポート」は、過去に「世界の登攀・遠征記録」の補遺的な目的でスタートした「山域別入山事情」を昨年度版より改題したものであり、また、収録地域も従来からのヒマラヤ、アラスカ、アンデスなどの他、比較的近い薄い辺境地域も加えて世界の山岳地帯への入国、入山のミニガイドとなっている。

また、巻末には海外読者の便を図るため、日本人の登山活動を中心にして英文サマリーが添付されている。

読後の印象としては、昨今の日本における中高年者の登山ブームを反映してか、我々の記憶にもまだ新しい一九八九年十月立山での大量遭難をはじめ、多くの中高年者のアクシデントが痛ましく伝えられているが、中高年の一人として勇気ある撤退や自力で難局を切り抜ける登山者としての行動力云々を問われないようにしたいものである。

一九九〇年九月 山と溪谷社刊 二八六頁 定価三六〇〇円

(近藤雅是)

女性のための百名山

坂倉登喜子編

暮れ近くに一冊のきれいな本がとどけられた。「女性のための百名山」。続いて図書紹介を書けとの委員会からのご命令。世をあげての百名山ブームに、またまたの感なしとはいえないが、頁をめくってみる。目次こそあるが、まえがきも序もなくいきなり本文に入る簡潔な本だ。

女性のためにとか名山という意味はよくわからないが、要するに中高年登

山者も含めて楽しめる中級山岳を女性だけの山のクラブ、エーデルワイスが全国規模で百名山選んだということだろう。筆者は現時点で、これらの百名山のうち訪れていないのは礼文岳と市房山だけであとは全部登っているから、一見しただけでそうと知れる。

紙幅の都合で内容までは深く立ち入れないが、全国的とはいっても東京周辺が圧倒的に多いのは致し方ないようだ。この全山にわたってコースタイム、交通、問い合わせ先、五万図そして写真と略図が入った便利で親切なガイドブックだ。執筆者は分担執筆の様だが、五十九の山行アドバイスが挿入されている。これは恐らく坂倉女史の執筆だろうと思う。最後に抜け目なくクラブの紹介まで入れてあるが、それぞれなかなか教えられるところも多い。とにかくオールカラーだけに美しくまた楽しい本だ。

坂倉さんと言えば一九一〇年生れ。もはや八十歳を越す。にもかかわらず、女性だけのクラブ、エーデルワイスを率いて三十五年、昨年だけでもその部厚い『年史』『関東周辺山と地酒の旅』(新潮社刊)、恒例十四回目的スリスの花の旅、ブータンへの花の旅、そしてまた山の会合には必ず彼女の顔があった。その上またまた本書の刊行といかに高齢化社会といえども現役を

しのぐ、これだけの活躍する人はいない。ただただ敬服するのみである。

一九九〇年九月 山と溪谷社刊 A5判 一六八頁 定価一九〇〇円 郵送料二六〇円 (小倉 厚)

山想八号

法政大学体育会

山岳部編

大学山岳部の衰退を耳にして久しい。部員減少を苦慮しながら細々と活動が続けたり、廃部寸前のところもあると聞く。そんな中で隆盛時のような部員数と活動内容をもつ法大山岳部が部報を発刊した。一九八五年から八九年まで五年間の活動がまとめられている。

一九八九年三月、ランタン・リルンの雪崩で犠牲となった二見、桑島、久本の三氏の追悼特集である。遭難後一年四ヶ月で部報がまとめられたが、実質期間は半年だと聞いている。この編集力こそ部を支えるOB会の力といえる。教育の一環としての大学山岳部の活動は、安全を第一義としながら、より質の高い活動を求めていく法大の姿勢には活気が満ちている。この遠征を出すまでに、八八年のクーンツ合宿、国内では積雪期の剎を中心に活動を展開し、若手OBと部員の実力を段階的

に養っている。春の知床半島スキー縦走、夏の日高の連続沢登りと、ユニークな視点での山行が山に対する考え方を幅広いものになっている。合宿には監督をはじめ、OBの参加が目立つ。大学山学部伝統を維持しながら、それにとらわれることなく新しいスタイルと発想の活動を追求する姿勢には学ぶべき点がたくさんある。

章立ての五つは、部歌の冬春夏秋に結びを加え、扉には部歌の各章がOB会員のカットとともに配されている。秋の章では、昭和三十一年以降、合宿中に遭難死された六名の部員の追悼をし、関係者が新たに文章を寄せている。編集者の熱意が伝わってくる。

素晴らしい書き手が多いのもこの部報の特長である。遭難する一週間前に書かれた桑島氏の、父親にあてた手紙は手書きのまま載せられている。氏の短い生涯を凝縮した魂の軌跡とも呼べる文章が綴られている。山だけでなく、社会的にも活躍が予想されるだけに残念としか言いようがない。

遭難の反省と四年間の活動内容が、二つの座談会にまとめられている。現役とOBが自分の考えを主張しながら、部の発展を願う心情がじかに伝わってきて、大学山岳部のひとつのあり方を示唆してくれている。行きづまりを感じている部員や部を指導する立場にある者には大変参考になる一書である。今回、前監督の村井氏を通じて読む機会を得た。

平成二年七月五日 法政大学体育会
山岳部刊 四〇四頁 非売品
(宇都木慎一)

〔報告〕

現地小集会 生藤山

山口 力男

年末前の忙しいひとときですが、「のんびりとひだまりの山歩きを」とのお誘いで平成二年十二月十六日、桜並木の有名な生藤山(九九〇・六畧)山行を行った。

年末前のあわただしい時期にもかかわらず集会委員の皆さん、途中からの参加者も合わせ、合計三十一名が午前九時三十分上野原駅に集合、九時五十分発の井戸行きバスに乗り、約二十分石楠神社前に下車、神社の裏手からのんびり歩き始め、途中民家の横で無料サービスの「ゆず」を貰い登山を開始、登り始めて間もなく迂回して来た林道を横切って山道に入り、杉林の中をジグザクにゆっくり登り佐野川峠に到着、ここで幾分汗ばんだ肌に冷気をあてながら、ひと休みする。ここから左折し、なだらかな稜線をたどり甘草水入口に着く。遠方は幾分かすみがちではあるが道志、丹沢の山々が良

く見え、良い眺めであった。

しかし、ご多分にもれずゴルフ場も数多く見え、複雑な感じであった。再びゆるやかな稜線を登り、やがて三国山に到着、各々日だまりで昼食。食事の後時間的にかなりゆとりがあるため、一応小集会を解散し、当初の予定通り、生藤山に登ったあと、来た道に戻る

Aグループと生藤山 醍醐丸、和田峠のBグループに別れて自由行動とした。Aグループは生藤山、茅丸を登った後、巻き道を通って三国山に戻り、パラパラ落ちてきた雪をめでながら下山、年末の和やかな山行を終了した。

石楠神社到着が午後三時四十分。次のバスまで約一時間以上もあり、夕方になり寒さも厳しくなったため、タクシーを呼んで上野原に出た。嶋崎さんをはじめ、気をくばっていた集會委員の皆さんに改めてお礼を申し上げます。

〔参加者〕須藤節子、百瀬健彦、北村義男、宮本信一、柳下棟生、山口力男・光子、松沢君子、茂木洋子、橋本雅子、小田和美、大関保、遠田栄、Pierre Mounorge、南川金一、小林太刀夫、入沢郁夫、川善市、鈴木快信、神山良雄、嶋崎道忠、北原みゆき、高沢英雄・佐恵子、山口暁、中川尚、河野之保、河野幾雄、吉野多美子、窪田治夫・操

磐司岩探索山行(2)

科学研究委員会

A班は雲一つない秋空のもと、右手に大東岳(おおあづまがたけ)の橙色に輝いた山頂を見ながら歩き出した。トッパを行く柴崎リーダーが時々立ち止まって木々の名前など説明するが、二〇名の大部隊では後部の者には聞きとれない。三十分ピッチ程度のゆっくりとしたペースで小行沢を過ぎ、杉林の中の立石沢に着く。ここからやや急な上りとなり、ブナ、カエデ、ミズナラも現われて、秋山の雰囲気となる。ひと登りで稜線の見晴台。正面に大きな船形山。宮城支部員はキノコ探しに忙しい。高木がまばらになり、イヌガヤの赤い実が目だち始めた頃一〇二三畧のピークに飛び出し、ブナもみじに燃える大東岳が大きくそびえて見えた。

こぶし平を過ぎ、ハナコスリの急坂にかかると、鼻がこすれる程ではない。やがて傾斜は次第にゆるくなって、十一時五分、一三六六畧の頂上に出た。東に松島湾、西に月山が見え、付近にはイヌツゲ、シャクナゲ、ドウダン、チシマザサ、ゴヨウマツなどが繁っている。

ビールで乾杯の後昼食。食後記念撮影しようとした時に、宮城支部の佐々木郁男氏が登って来たので、全員でカメラに納まり、十二時四十分出発。

五分ほど下がった所で、蔵王、最上・仙台両神室、小東、南面白の峰々が見渡せた。彌吉ころがしの急斜面を下り、沢に沿って行くと、広いブナ林の中、快適なナメ状の樋ノ沢の出合に着いた。ここからは小東岳あるいは北石橋への道を右に分けつつ、大沢沢の林の中を進む。やがて沢の左岸をへつるようになり、裏警司展望台に出た。昨日見た表警司と違って木が繁り、岩も堅そう。続いて雨滝に出、滝の下で雨シブキを浴びる。後はひたすら歩いて十五時四十五分、全員無事山荘に着いた。

(北野忠彦)

B班は大沢沢に沿って歩く。さまざまな色合の山が青空に映えて誠に美しい。シブキになって落下する雨滝を過ぎ、紅葉に彩られた壮大な裏警司の岩壁を左に眺めて歩く。岩壁中央にスズメバチの巨大な巣があるというので、交互に双眼鏡で覗く。京淵沢ではナメコ、サワモダシ、ブナコノカ等の収穫があった。九時四十分材木沢の出合に着く。ここの徒渉点では、宮城支部員が老会員を背負って渡るという一幕もあった。最奥の北石橋は高さ三

(自然保護随想)

美しい風景を守りたい

山では空缶やゴミの持ち帰りなどは、常識だと思っただが、必ずしも守られていない。いま、都会でのゴミ処理意識が高まりつつあるから、山のゴミに対しても理解が深まるのではなからうか。それにしてもお互いの努力、根気よいPRが必要だろう。

昭和十年代、私が中学生の頃親戚の者に連れられて、八甲田山に登ったことがある。途中、名前は忘れたが温泉に泊まった。湯治場である。便所へ入ると下は十数分、奔流であった。吃驚したと同時に、これが水洗便所と言うものかと妙な感心をした。今ではよほどの山奥でないかぎり許されないだろうが。

とも角、人間在る限り尿尿の問題を避けるわけにはいかない。もちろん山小屋でも大問題で関係者もいろいろ策を講じているが、根本的な解決は難しい。

そこで、化学薬品などを投入すれば無臭となり、固型化し、顆粒状フン末化して下界におろすことは、無理だ

ろうか。肥効性が高ければ、企業が買いに来るかもしれない、と言う発想はどうだろうか。新しい花を咲かせる(可憐さはないが)バイオ技術の発達、谷をぬい山を越えて数百メートル先の目標に命中するミサイル、ミサイルを打ち落すミサイルがある世の中だから、それなりの研究費をかければ不可能ではないと思うのだが。

開発と保護は、相い容れない要素を持つだけに、完全な解決は難しい。妥協はどちらかが後退するだけであり、その接点を後退させて森林破壊に及ぶと、回復に数百年、場合によれば回復不能になることは識者の指摘するところだ。現在の自然保護論では自然生態系を、またその人間との関わりを言うことが多いが、率直に我々登山者の心の中には、先ず美しい風景が無くなると思う思いが閃くに違いない。各地で大規模スキー場開発が行われているが、山をバリカンで筋目をつけて刈り上げたようなスキー場、横への裾刈型、さらに縦横無尽型もある。とくに無雪期にでもなれば無惨だ。「山は心の故郷」などは死語になる。ましてや地元の人にとっては原風景が失われるのだ。美しい風景を失いたくない。

(藤井 健)

〇〇、長さ二〇〇位の天然の見事な石橋である。早速写真を撮ったり、スケッチをしたり、上に攀じ登ったりして楽しみ、ここで昼食。

帰路、梯子滝付近では野猿が数十匹現われ、しばらく私どもと前後して行進した。エサを与えると、野性を損なうおそれがあるというので、エサを与えることは止めた。警司山荘には十五

時二十分に着いた。

入浴後、再び宮城支部会員の車で仙台駅に向かった。改めて柴崎講師並びに宮城支部の皆さんに心からお礼を申し上げる次第である。

(参加者) 一般 遠藤明男、菅野弘章、賀嶋増造、林桂子、入谷浩右、中村あや、里見清子、宮前淑子、中村恒子、大塚玲子、須藤節子、野々口文子、茂

木洋子、北村義男。宮城支部 庄司駒男、星勝雄、佐々木郁男、柴崎徹、千田早苗、佐々木豊喜、遠藤昭治、高橋二義、佐々木裕二、後藤邦慶、鈴木晃三。科学研究委員 鳥居亮、中村純二、斉藤桂、梅野淑子、石田要久、大木淑子、森武昭、石井恵美子、奥野道治、北野忠彦 以上三十五名。

(中村純二)

越後支部年次晩餐会

越後支部

日本山岳会の年次晩餐会に遅れること一週間、十二月九日午後四時新潟駅前近くの東映ホテルで、越後支部でも第一回の年次晩餐会が行なわれた。

式次第は鈴木敏雄会員の司会により進められ、冒頭挨拶に立った佐藤一栄支部長は、今迄の支部の行事は、弥彦山での高頭祭(発起人)と、年一回の親睦登山だけだったが、これだけでは越後支部の会員二八〇名が山で会う機会が少ないため、本部にならって越後支部でも、第一回の年次晩餐会を計画した。当初どの位の参加者があるか、いささか心配したが、六〇名もの参加者があり、遠く東京や、埼玉県からも忙しい中を駆付けていただき、担当者と共に喜びたいと開会の謝辞があり、続いて佐久間惇一、花井馨、望月力の三氏を支部名誉会員に推薦するむねの推薦文の朗読、花束贈呈。越後支部では、すでに藤島玄、笠原藤七、金山淳二の三氏が支部名誉会員に推薦されており計六名となった。

三氏への記念品は最近復刻された越後支部の機関誌の『越後山岳』であり、これは昭和二十三年の創刊号より、三

十年に発刊された五号迄が、現在では入手不能となったため、このたび集成復刻版が晩餐会に花をそえるべく発刊されたものである。次いで花井、望月両氏のお礼の言葉があり、佐久間氏は体調を崩しておられるため欠席し、代って五十嵐篤雄会員より御礼と近況の報告があった。

筑木力会員より第八号の決算報告があり、室賀輝男会員より、創立人である高頭仁兵衛翁が、昭和十五年に苗場山の神楽ヶ峯に建立した「天下の霊観」顕彰碑が落雷で破損したための修復の献金の依頼があった。山田勲会員の越後山岳復刻限定五百部の報告が続き、高橋庄一会員により出席者全員の記念撮影後、本部永年会員の金山淳二氏による乾杯の音頭で記念ある第一回の越後支部年次晩餐会の開宴となり、和やかに旧知の円卓は、互いに交友を分かちあった。

宴半ば、三人の新人会員の紹介があり、盛大な拍手で迎えられた。

宴も終りに近づき、上村幹雄会員の閉会の辞で、記念すべき越後支部での年次晩餐会は終了し、参加者は、来年の第二回の再会を誓いながら師走の街に三々五々散っていった。

(出席者) 佐藤一栄、筑木力、上村幹雄、山田一介、高橋庄一、鈴木敏雄、朝妻三松、荒井辰弥、本望英紀、井出秀雄、

加藤明文、古沢康令、山田勲、飯田武夫、加藤記代子、山田智子、江田宗友、平松勝司、井上勇、土田幸雄、三堀正純、遁所疆二、柳沢一男、室賀輝男、藤井信、金山淳二、上野寿一、矢尾板二郎、岩下光男、岩下香代子、矢尾板奈々子、渡辺典夫、五十嵐篤雄、田辺信行、古川文男、小川重蔵、望月力、久保敏男、樋口宗一、加藤利雄、石田国夫、平田大六、荒木吉栄、花井馨、宿屋昭二、堀川正路、山崎幸和、木村操一、早川英夫、山田一男、桑原一郎、桑原悌治、田仁代、荒井謙之輔、原田敬子、渡辺欣次、小林範男、笠原藤七、平田静一郎、二瓶齊 (本望英紀)

三水会現地集会

秩父・観音院と城峰山

平成三年一月十二日、初雪が舞う東京、西武池袋駅から秩父へと向かう。雪の秩父札所めぐりになるのかと思っただけ、秩父に着くころには青空が覗き薄日さえさしてきた。

夜祭りで知られている秩父神社の近くで昼食をとって、手配しておいた車に分乗して三十一番札所観音院に行く。ゆつくりと参詣して今宵の宿、千鹿谷鉱泉へ再び車を走らせる。

千鹿谷鉱泉は秩父七湯温泉郷の一つで、山間の宿であった。浴場は小さい

が、いつでも入れるのがいい。遅れてやって来た人も集まり、十八名全員がそろって新年会となった。皆さん酒豪ぞろいだ、たちまちビールや徳利の空が並ぶ。和気藹藹の内に夜は更けていった。

翌、十三日は快晴で明けた。今日は車が一台増えて四台となって城峰山へと向かう。途中、棕神社に寄って参拝する。ここは吉田の龍勢でも知られ、その打上げの映像を脳裏に描きつつ、再び車に乗って城峰山の林道を行く。石間峠の少し手前で下車し、坂倉登喜子リリーダーのもとしかりしたオーダーを組んで歩きだす。ほどなくして城峰神社に着く。参拝して頂上を目指す。風もなく暖かな日和に恵まれて、全員城峰山(二〇三八m)の頂上に立った。さすが一等三角点の山、展望は見事であった。遠く近隣の白い山、黒い山々は見飽きることがないが、車の待つ石間峠へ下り始める。

昼食は、小鹿野町にある代官料理を味わう趣向となっている。江戸時代の情緒をのこす「代官の間」を見学して、「評定の間」(大広間)に席を移して食事となった。これは昨夕の新年会の続きでもある。御簾の巻き上がった上段の間に座った今井喜美子さん、中保さん、河野幾雄さん、坂倉登喜子さんの御四方の、やかしくまった姿でお酒

を飲む表情は、少し可笑しくもあった
(失礼)。

大いに盛り上がり、ゆっくりと寛いで、西武秩父駅で解散となった。

(参加者) 乾能尚、今井喜美子、大町愛子、岡野修、川上光久、木村俊博、河野幾雄、河野之保、坂倉登喜子、重村清、高田眞哉、滝沢ちよ子、内藤勇、中保、平沢哲臣、山下順子、横溝修一、平戸孝夫 (平戸孝夫)

遭難事故に対する警告

本会の遭難対策委員会と(社)日本山岳協会の遭難対策委員会では、二月十八日、本会会議室において緊急対策会議を開いて、今冬の遭難事故を分析、春山を前にして、登山者各位に対する要望書を作成、二月二十二日、体協で発表した。

今冬の遭難について

暖冬を予想された今冬の年末年始でしたが、ご承知の通り低気圧の影響等で山岳地帯は厳冬期特有の大荒れの状態となりました。そのため各地で多数の登山者が立往生したり、行動不能の

状態になりました。

本来どんな困難な場合でも、自分の力で脱出するのが登山者の本来の姿です。その意味で、今回の遭難多発は登山に関係するものとしてまことに残念でなりません。数年来の暖冬のため状況を甘く見たとの批判を浴びるのも止むを得ない事でしょう。

そのため、山岳地帯の地元の方々は多大のご迷惑をおかけ致しました。ご努力で多くの方々の生命が救われた事は、登山関係者として感謝に耐えません。心からお礼を申し上げたいと思います。

この問題について、日本山岳協会及び日本山岳会は緊急の会議を持ち、この席で今冬の遭難の原因の分析を行いました。

冬山で例年多発する雪崩、転・滑落等の事故と異なって、立往生が目立ったということは、(1)技術の不熟さ (2)状況判断の甘さ (3)自己脱出能力の低さ 等でした。これらを踏まえて、私共は今後全力を挙げて、組織登山者は勿論、未組織登山者にも技術の向上を含めて強力に指導力を発揮したいと考えております。

さらに様々な機会をとらえて遭難予防アップルを行っていきたくと考えております。今後ともこれまで以上に関係各位のご支援、ご協力を心からお

願い申し上げます。

平成三年二月二十二日

(社)日本山岳協会会長 鎌田 久
(社)日本山岳会会長 山田二郎

関係各位

要 望 書

皆様、ご承知の通り、昨年に続き今年も亦北アルプスを中心とした冬山登山で数多くの遭難事故が起って居ります。

スポーツ登山が山という大自然を相手に、安全限界に挑戦するスポーツである以上、私達は一步誤れば生命に係わる事故に繋がる可能性を持つものであることを深く認識して取組むべきであります。

限界に挑戦しながら、而も自分達だけの力量によって山に登り、そして安全に降りて来るためには周到な準備と適確な判断力を備えることが不可欠であります。

何時、何が起っても不思議でないのが冬山です。その点については十分に承知載っていることと思いますが、昨年に引続く今年の一部遭難者の醜態は

甚だ残念なことでもあります。

しかしどんな場合でも人間の生命は大切です。危機にさらされている登山者は救出しなければなりません。

自治体のご協力で山岳地帯の救助組織は確立されており、技術、装備訓練も行届いております。吹雪の中、危険をおかして救助に向う方々の命の大切さをもう一度自覚する必要があると思います。さらに地元の方々の経済的負担は膨大です。

「冬山を甘く見るな」と、これまで多くの方々が言われてきました。これらを他人事に聞いていては遭難の防止にはなりません。自分自身の問題として受止める必要があるでしょう。

登山は自分の責任で成立つスポーツだと自覚することによって、山岳地帯の方々の迷惑も、家族の悲しみも除去できるでしょう。

機械に頼らないで自分の力で下山できる登山であるよう重ねて自戒をお願い致します。

厳しい冬山のシーズンも終りに近付き、愈々これからは春山のシーズンを迎えますが、北アルプスを中心とした裏日本の春山は積雪も多く場合によっ

次代に残そう美しい山と溪

ては、冬山以上に危険性が高いので、春山という言葉に惑わされず冬山の延長線だとお考え戴きたい。

計画に不備がないか、万一にも立往生するようなことはないか、不測の事態により行動不能となった時の通信手段はあるのか、再度見直しをお願いしたいと思います。

この時に当り、私共はこれから春山に入山される登山者各位に、自分達の楽しみのために他人に迷惑をかけることのないよう重ねて強く切望するものです。

平成三年二月二十二日

社団法人 日本山岳協会
社団法人 日本山岳会

登山者の皆様へ

・会務報告

平成二年度

第二回 海外登山基金委員会

日時 一月十二日(土)十四時〜十七時

場所 本会会議室

出席委員 村木委員長、藤平、今西、大塚、宮下、鹿野、橋本、松田、西村、重廣各委員
(委任出席) 原委員

議事

一、平成二年度第二回助成金割当の件
初年度は、総会で発表した関係上、

ブレモンスーンにでかける隊が間に合わなかったこともあり、助成金支給の方法を軌道にのせるため、本年度に限り、第二回目の助成を行い、ルール化することにした。

本件については、会報『山』五四三(九月)号にて告示。十二月末を以て締切ったところ、四隊の申し込みがあったので、その割り当てのための審議を行うことにした。

今回申請のあった四隊は、隊の規模や目標とする山の高さは異なるが、いずれもユニークで優秀な隊で、できれば全隊に割当てを行いたいということになり、五〇万円の予算枠増枠を含め、次の通りの割当て案を作成、理事会に答申することにした。

①ナムチャバルワ日中合同登山隊……一五〇万円

②明大チヨモランマ登山隊……一〇〇万円

③早大カラコルム登山隊……五〇万円

④本会京都支部テリリチミル登山隊……五〇万円

二、平成三年度以降の助成について
(イ) 毎年一回、九月に告示(会報『山』紙上)、十二月末締切り、一月審議。
二月一日〜翌年一月末の登山隊を対象とする。

(ロ) 助成額は三〇〇万円以上、優秀な隊であれば、本会以外の隊も対象とな

りうる。

一月理事会

一月十七日 十八時三十分

場所 本会会議室

出席者 山田会長、村木、藤平両副会長、松田、西村、重廣、山本、小林、入沢、小倉、穴田、石橋、織田沢、関口、神崎、藤井各理事、平林、小倉、橋本、嶋原、大島各常任評議員、太田監事、沢井自然保護委員長
(委任出席) 松本、伊丹理事、飯野監事
山田会長の年頭挨拶の後議事に入る。

▽議事

一、海外登山基金割当ての件(村木)
平成二年度に限り二回目の募集を行うことにしたところ四隊の応募があったので、一月十二日、基金委員会を開いて審議した。その報告に基き、理事会としては五〇万円増額した三五〇万円を次の各隊に助成することを承認した。

①ナムチャバルワ日中合同登山隊……一五〇万円

②明大チヨモランマ登山隊……一〇〇万円

③早大カラコルム登山隊……五〇万円

④京都支部テリリチミル登山隊……五〇万円

なお西村理事からは、来年度以降は、毎年一回、十二月末締切り、一月審議

で二月一日〜翌年一月末日に出かける登山隊を対象に割当てを行うことでルール化したい旨の説明があり、併せて承認した。

二、鳥海山南麓のスキー場開発方法の変更を求める要望書提出の件(沢井)
沢井委員長より要望書作成の趣旨ならびに内容について説明があり、種々検討の結果、本件は、要望書の提出そのものについては賛成であるが、方法論に問題がある。できれば地元山形支部を含めた形で行うようにした方がよい。

なお時期を急ぐのであれば、委員長名で要望書を作り、地元と話し合うようにし、会長名による要望はその後でもよいのではないかとということで意見の一致を見た。

三、ナムチャバルワ偵察隊報告(重廣)
既報の通り、ナイブルートからの偵察はほぼ満足すべき成果を得、登頂の可能性が見出せたとの報告があった。

今後の予定としては二月末に北京で技術委員会を開いて計画の細部をつめ四月末日、東京で議定書の調印を行う予定である。

なお西村理事からは偵察隊の費用は年度をまたがるので仮払金で処理したい旨の説明があり、本件も併せて了承した。

四、山研改築の件(石橋)

基本設計がまとまったので、環境庁当局の了承を求めると共に、会報紙上で説明して、会員各位の意見ももめた上で、実施案を決めることにしたい。

これに関連し村木副会長からは、研究施設としてクリーン・エネルギーの利用もとり入れるべきである旨の発言があり、前向きに検討することにする。

五、石岡氏からの要望書の件(藤平) 技術上の問題にふれると膨大なものになるので、取消し請求のあったものに限り、前提として、会報『山』で本会としての見解を掲載することを了承する。

六、報告事項

(1)秩父宮記念学術賞受賞の件 日本学術振興会より本年度は、本会から推薦した「登山に関する気象学の研究」に決定した旨の通知を受けた。

(2)H A T - J シンポジウムの件

一月十三日、第一回目のシンポジウムと出席者による懇親会が行われた。

(3)『山陰の百山』が鳥取県出版文化賞を受賞した。

七、委員会報告

○集会(入沢) 一月十二日～十五日、八方尾根スキー集会を実施。四十二名参加。

六月の第二週に予定している若葉会山行は、岩手支部の協力を得て七時雨

山荘で行う予定。

○指導(小林)

第一回スポーツコーチサミットに参加した。トレーニングに対する科学的アプローチは参考になった。

○海外(神崎)

UIAAによるスポーツ・クライミングのワールドカップが本年十月十六日～二十日、日山協が主催して東京で開催されることになったので、若手の参加を希望する。

○総務(藤井)

新入会員のオリエンテーションを三月十六日(土)、上智大学の講堂で行う予定。

○高所登山(重廣)

ナムチャバルワ登山の事務局は三月を目途に開設したい。登山期間は九月十五日～十二月末日を予定。

○医療(関口)

『登山医学』第十巻を刊行した。次回登山医学研究会は七月十三日～十四日、北里研究所本館で開催の予定。

○科学(関口)

し尿雑排水処理問題をテーマとした山岳地域に於ける環境保全のシンポジウムを四月六日(土)午後一時より青山学院大学で開催の予定。

○自然保護

新たに委員として会員番号七五〇〇番の羽賀克己氏を委嘱したい旨提案あり

り本件、承認する。

ルーム日誌

(1月)

10日 学生部

11日 青年部、自然保護委員会

12日 海外登山基金委員会

16日 三水会

17日 ナムチャバルワ会議、山研委員会、理事会

18日 科学委員会、資料委員会

21日 総務委員会

22日 婦人懇談会、自然保護委員会

24日 科学委員会

25日 図書委員会

28日 フィールド委員会

29日 スケッチ同好会

30日 アルパインスキー同好会

1月来室者309名

..... 9月

改姓

清水春代(七二〇八) ↓ 深江春代

泰平寺直道(五三九六) ↓ 大久保直道

物故

渡辺嘉男(二四七六)

1・1

沼倉寛二郎(二一八五)

1・15

早川良太郎(一六四五)

1・27

退会

宮地佳枝(九三五一)

芝五鈴(二〇三六七)

岡田安正(九一四二)
石塚正明(四五六六)

タンポチエ僧院再建協力

募金者ご芳名

一、二四一、九六六円(出)日本山岳協会。三万円一名村義人。一万円一平野紀子、三鍋久雄、市川義輝。五千元一池戸誠二郎、山本聖二、山本武志。二月一日現在累計四二六名、累計金額五、五六二、三四〇円。

お知らせ

(予告)

○婦人懇談会全国集会

今年も十月、全国集会を開きます。青森県と秋田県境、ブナを中心とする天然林で知られる白神の山麓、八森に集合です。詳しくは後日お知らせしますので秋の予定にどうぞ。

秋田支部・宮城支部・婦人懇談会

●設立二十周年記念山行

岐阜支部

期 日 平成三年五月二十五日(土)～

二十六日(日)

場 所 恵那峡国際ホテル 岐阜県恵

那市恵那峡 TEL〇五七三

二六〇二二一

費用 宿泊代(懇親会含) 一泊三食

二〇〇〇〇円(弁当、缶ビール、記念品代、輸送代含)

集合 五月二十五日(土) 恵那峡国

際ホテル 午後三〜五時頃

記念山行 五月二十六日(日) 恵那山

申込み先 〒500 岐阜市加納奥平町一

二二 高木基揚宛

TEL〇五八二一七三一二六

五〇(夜間のみ)

住所、氏名、電話番号、参加費同封の上、四月三十日(火)までに申込んで下さい

●第10回深田祭へのお誘い

日時 一九九一年四月二十一日

行事 茅ヶ岳記念山行・碑前祭ほか

問い合わせ先 深田祭実行委員会

〒407 韮崎市水神一―三一―

TEL 055―22―1111 内線237

平成三年三月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話 東京(3261) 四四三三

振替口座 東京三―四八二九番

東京都港区赤坂一―三一六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂